

## 設計競技のもうひとつの意味

建築のコンペと言えば、日本では建築家のデザイン競技、その主張を通すための手段と理解されているように思う。実は、建築のコンペには、もう一つ重要な役割があるのに、それがほとんど知られていない。

ドイツの郊外で、新しい団地をつくるときには幾つかの行政地域に跨ることがある。そんな場合、ドイツは都市国家だから、行政地域の利害が激しく対立するのは当然である。それを解決する手段として設計競技（設計コンペ）が使われている。その鍵になるのが、すべての利害関係者に案を出させることなのである。

提案者は誰でも良いし、それぞれが支持団体の利益を代表して案を作るのは当然であろう。だが、それだけでは案が採用される可能性は少ない。審査員が公正であれば、一部の関係者だけが満足する案よりは、より多くの関係者が納得する案を選ぶからだ。そこで、提案者も、自分たちと対立する人たちのことにも配慮した案を考えることになる。それでも、すべての利害関係者に提案者として参加させることが、絶対に必要である。言うまでもない、もし利害関係

たという。

ある大学のキャンパス再開発をコンペで募集した時のことである。前々から、その再開発について熱心な意見を持っていたA教授が、病氣療養中であるというので、筆者は、その病室に建築学科の教授を派遣して、その意見に沿った図面を作って応募してもらうことを提案した。提案は大学事務局に採用され、立派な応募案が出来た。残念ながらその案は入選しなかったが、A教授には、当選案に十分納得してもらったことが出来た。大学が計画を決定し、いよいよ実行という段取りの集会を開いたとき、例によって再開発に反対を叫ぶ学生代表と称する人物が会場に侵入し、勝手に発言を始めた。そこで、筆者は「何故コンペに応募しなかったのか。時間も、手段も十分与えられているはずであったのに」と言って追い返した。

日本の公共工事が、反対運動に遮られて何時までも決まらないのは、逐次、案を提出している場合が多い。第一案がBという団体の反対を受けると第二案が作られる、それがCという団体の反対を受けると、第三案が出され、それがまたDという関係者に反対されるという具合であれば、あれよという間に歳月が費やされてい

# 設計競技

## — 利害関係の收拾から、契約まで —

東京大学名誉教授  
内田祥哉  
Yositika Utida

るように思う。

## 設計競技には必要条件の明示を

コンペの実行には、なんやかんや言っても手間暇が掛かる。それならば結果を契約にまで結びつけるのが得策である。ところが、近年は、コンペの入選案が予算を上回る、設計を直せば工期が守れない、などコンペに対する苦情は巷に溢れている。それは、コンペの条件にあらじめ工事価格と工期を入れていないからだ。

日本には、そんなコンペの先例がある。一九七〇年に募集された「パイロットハウス技術提案競技」（一九七〇～七一）、次いで行われた「工業化工法による芦屋浜高層住宅プロジェクト提案競技」（一九七二～七三）などである。「パイロットハウス技術提案競技」は、戦後の第二期五カ年計画の中で、九五〇万戸を発注しようとしたもので、年間九〇万戸の供給を可能とする工場生産住宅計画の募集であった。また「工業化工法による芦屋浜高層住宅プロジェクト提案競技」は、敷地を与えられた実施計画の一つだった。

当時の日本は、賃金も物価も上昇する中であつたが、性能にも、価格にも、枠を嵌めた競技

者の中に参加していないグループがあると、案が決まった後で、不満が表面化し、それが反対運動にでも発展すれば、せっかく決定した案が実行不能になることもあるからだ。

利害関係者の中には、少人数のグループもあり、提案のための予算を持っていないこともある。そんな時にはコンペの主催者は、提案を作るための費用を補助金として用意する。それでも、提案を作る人材に縁のないグループもある。それに対しては、人材も派遣する。裁判にたとえれば公選弁護人の提供に相当するのだろう。とにかく、利害関係者のすべてが設計競技に参加できるように手段を尽くして、案を出させる。それにより、出そろった提案以外には、案があり得ないことを周知し、その中から、最善の案を選択すればすべての関係者の納得が得られるはずだ、という論理である。

## 設計競技で意見を集約

聞くところによると、ドイツでは、反対運動のグループに補助金を出し、作らせた案を自治体が飲み込んで、再開発を円満に解決した例があるというし、最後まで参加しなかった住人の一人、床屋の主人を審査員に入れたこともあつ

であった。「パイロットハウス技術提案競技」の方は、入選案を試行建設した上で入念な性能試験が実施され、合格した製品は、自らの提案した価格を、物価の上昇で修正した上で受注した。「工業化工法による芦屋浜高層住宅プロジェクト提案競技」は一九七二年に入選が決まり、これも、物価の上昇と、耐震性能の見直しを織り込んだ上で、直ちに建設開始（一九七五）、一九七九年には入居が始まり、一九八二年に完成した。当時は、「国民自動車」、「新幹線」などの話題が一段落し、次は住宅産業という期待が産業界にあつたから、著名な大企業が多数参加し社会の話題となるプロジェクトとなった。

これらのプロジェクトは、何れも一九九五年の阪神・淡路大震災を実体験することになった。芦屋浜の高層住宅は、鉄骨破断という大きな損傷を受けたのであるが、人命への影響はなく、今も居住に供されている。性能、工事費、工期の三つを約束し、設計施工の責任を一括した契約に連結した提案競技だったのである。

コンペは発注につなげなければ徒労である。設計施工、一括発注につなげるためには、「性能」「工事費」「工期」が約束されていることが必要不可欠である。